

## ジェファスンとフランス革命

服部, 哲郎

<https://doi.org/10.15017/2335126>

---

出版情報 : 史淵. 60, pp.51-68, 1954-02-18. 九州大学文学部  
バージョン :  
権利関係 :

# ジェファアスンとフランス革命

服部哲郎

は し が き

ジェファアスンがフランス革命に與えたものは何か。ジェファアスンがフランス革命から受取つたものは何か。アメリカに於て革命權の肯定者であり、獨立革命の推進者であつた彼が何故にパリに於てはあたかも保守主義者のように振舞ひ、立憲君主制の練で革命を著せしめんと劃策したか。あるときは暴力を憎むが如く、他の時には流血をも敢て辭せざるが如き彼の革命觀の本質は何か。それらへの考察がとりもなほさず本稿の課題にはかならぬ。たゞし、本稿に於て到達したものは、主として、それらの問題に關するジェファアスン自身の言説に依據したもので、その点資料的視野の狹隘さを免れず、一會廣い資料的基礎による研究を後日に期したい。

○

フランス革命の初期の段階に於てジェファアスンが革命家たちの運動にどのような影響力を與え、かくてフランス革命にいかなる實際的な役割を演じたかについて、今日その眞實を克明に知ることがはひじやうにむづかしい。おそらくそれはジェファアスンの傳記作者J・S・ウィリアムズ(J. S. Williams)もさつてゐるやうに、一つには彼の人となり、又一つには一國を代表した外交官としての彼の微妙な立場が、彼をしてその間の消息を輕々しく公表することをはゞからしめたのであつて、その結果それらの點につき彼自身の手によつて書き残された資料の甚だ少ないということが、たしかに大きな原因の一つであらう。それにも拘らず當時彼がパリから故國の友人たちに宛てたいくつかの書簡や、とりわけその晩年に至つて認めた自叙傳などによつて當時に於ける彼の活動を斷片的乍らある程度まで窺ひ知ることがは決して不可能ではなす。なおこの點に關しては當時彼と交渉のあつた英國の駐佛大使ドーセット公(Duke of Dorset)の書簡や米國の外交官モーリス(Gouverneur Morris)の日記なども若干の光りを投ずるに違ひないのであるが、こゝではたゞ間接にしか参照出來なかつたことを遺憾におもふ。

さてジェファスンが駐佛公使としてパリに赴任したのは一七九六年八月六日のことであつた。爾來當然のこと乍ら彼はフランス政界の主要人物との廣い交際を通してフランスの政局の理解につとめる一方、暇にまかせて或はパリーの街の隈を、或は遠く郊外に出かけて田園を散策しつゝこの國の社會狀勢の把握に専念した。彼は凡て自分の目で見、自分の耳で聞くことによつてのみ正しい知識に到達せんとする科學的精神の持主で、その實證的態度の眞摯さは例えばバステューの暴動が起つた際にわざわざ秘書と共にヴェルサイユの現地まで出掛けて行つてその死傷者の數を確めようとした程であつた。従つて彼がフランスに滞在した期間は僅か前後三年余に過ぎなかつたけれども、そのフランスに對する認識には極めて博く且つ深いものがあり、かゝる知識を基礎にしてフランスの革命主義者達に與えた彼の助言は頗る確信に充ちたものであつた。勿論彼は革命の先達として非常な尊敬と信用とを以てフランス人の間に重んぜられていたようである。彼は屢々半ば公然とフランスに於ける政治的活動への助力を求められ、例えば彼の自叙傳は一七九八年七月二十日附書簡を以て、憲法案修正委員會からその委員長ボルドゥー大司教(Archevêque de Bordeaux)の名に於て、同委員會の審議に出席して助言するよう懇請を受けたこと、又、ラファイエット侯(Marquise de La Fayette)がその「愛國派」の同志數人を伴つて彼の邸宅を訪問し、前後六時間にも亘つて彼の面前で革命運動に關する討論を行つたが、その翌朝彼が事の顛末を時のフランス外相モンモラン伯(Comte de Monmorin)に報告して諒解を求めたとき、同伯は既に萬事を諒承して、却つて同伯から今後ともよろしく一層の助力を乞う旨の依頼を受けたことを記している。もつとも、これらに對して彼は國家的代表としての責任に鑑み、フランス國民に最も有益な施策がとられるようひたすら念願しつゝも、フランスの内政に干與するようない切の行動をさしひかえねばならぬ旨を答えて辭退した顛末を附記し、その外交官としての態度の公正を明らかにすることを忘れていないが、しかも一方に於て同じ自叙傳の他の箇所は彼が實際上革命主義者達の政治活動にかなり積極的な援助を與えていた事實をわれわれに示しているのである。即ち彼は種々の情勢に基き、當時フランスの國王には既に事態の重大

なる推移に鑑み、國民に對する統治權の大巾な讓渡、行政の民主化につきかなり思い切つた措置を取行する用意があつたこと、すなわち(一)人身保護律による身體の自由、(二)良心の自由、(三)出版の自由、(四)陪審制度の設置、(五)代議制立法機關の設立、(六)國會の毎年召集、(七)國會による立法權の占有、(八)國會による課稅權の獨占、(九)閣僚責任制の確立などの諸事項については之を全面的に承認する用意があつたことを夙に確信し、ラファイエット一派の國民議會の領袖たちに即刻國王との妥協をすゝめ、以てとりあえず時のフランス政府が國民に對して讓歩し得る凡てを先づ確保し、尙お足らざるところは將來の機會を俟つことが賢明である旨極力慫慂した事實を明らかにしている。<sup>註7</sup>この助言に對し、彼等は別個の見解を持しそのまゝ無條件に之に従わなかつたようであるけれども、ジェファアソンのかゝる行動に關する記録は彼の初期フランス革命に對する基本的な態度とその考え方を考察する上に重要な資料たるを失わない。又これより先一七八九年八月四日の議會に於ける貴族による特權放棄の直後、革命派の分裂がいよ／＼表面化するや、ジェファアソンがラファイエットと共に兩派の抗争の調停に盡力したことをピエール・ガクソット (Pierre Gaxotte) がその著「フランス革命」(La Révolution Française)の中で指摘している。<sup>註8</sup>その具體的な行動内容は無論詳らかでないが、おもむにそれも當時革命主義者達の間に存在したかなり激しい意見の對立、戦線のみだれを統一し、能うべくくんば國王側の讓歩にかなりの確信のもてたその機會に、速かに國王との妥協を圖り、以てフランスの革命を一應立憲王制の確立という線で落着せしめたいとの彼の基本的な態度のあらわれに外ならぬと解される。何故に彼がフランス革命に於てこのような態度をとつたかについては何れ後段に於て再説する筈であるが、少くともその重要な理由の一つは當時のフランスの社會とその政局に關する彼自身の情勢判斷に基いたものとおもわれる。蓋し彼は當時のフランス社會、とりわけ農村社會の發展の後れについては極めてひどい印象をうけていたし、フランス人の政治的教養についてもその未熟さを充分知つていて、かりにフランス革命のより一層の前進、すなわち共和主義の實現が達成しえられたとしても果して未熟なフランスの社會が之を受容し、これを育成しうるやにつき少

らぬ疑念を抱いていたと考えられるからである。なおウイリアムズに依れば當時バリーに駐在していた英國大使ドーセツト公が一七八九年七月九日附本國首相宛書簡に於てジェファスンと第三階級 (Tierd Etat) の指導者たちとの間の緊密な關係を指摘し「彼等の構成する團體の名稱 (ラサンブレ・ナシヨナル (L'Assemblée Nationale) もジェファスンの助言に因つたと解せられる充分な理由がある」とまで報告している事實や、又同じく當時アメリカの駐佛外交官でジェファスンとあまりよくなかつたモリスの日記の示すところによるとジェファスンと革命主義者たちとの交渉は恐らく彼の自叙傳などによつて傳えられる以上の親密な關係があつたものと想定される。

○

ともあれバリーに於けるジェファスンの活動は、一七八九年九月二十六日日本國からの召還によつて中斷された。その日は急遽バリーを立去つたからである。(尤も彼は十月八日までに向い風のため出港出来なくてル・アーブル港にいた) 勿論彼とフランス革命との關係はその歸國によつて中絶されたわけではない。それどころか大西洋の隔りは兩者の内面的關係を一層近づけた感さえある。しかもフランス革命に對する從來のどちらかといえば、びらでない個人的な性質を帯びていた彼の態度が向後はいわば公の場で公然と示されることとなり、それだけ彼のフランス革命に對する態度の決定も慎重且つ微妙なものとなつた。

さて、ジェファスンは遠からずフランス革命が成功裡に落着する期待を抱きつゝ歸國したのであつた。そして事態の進行も翌年秋頃から一部に共和主義者の抬頭のきざしが現われたとはいへ、概ね彼の期待を裏切らず平穩を持續するかに見えた。しかるにミラボーの急逝とそれに續く國王のバリ脱出事件の勃發は事態を急轉直下せしめ、而もその間列國の干渉という新なる要因を加えて革命は意外にも激化の様相をおひはじめたのである。

これより先アメリカに於ては獨立革命完遂以降フェデラリスト政權の下に反動の氣がみなぎりつつあつた折柄、フランス革命の勃發とその勝利の報道は烈しい興奮と高鳴る歡喜を以てこの國の大衆をとらえていた。蓋し獨立革命の苦難を克服し來つて未だいくばくもない彼等にとつては、當時アメリカの政界に於て激烈な論争の焦點であつた財政問題などよりはフランス國民が世界に呼びかけた「自由、平等、友愛」の呼びかけが遙かにわかり易く、且つ身を以て共感しうる所であつたのであろう。ニューヨークに於ては、フランスを祝して教會の尖塔の鐘が一齊に打ち鳴らされ、その居酒屋やサロンではられつの廻らない言葉でフランスの民衆のために祝福の演説がぶたれた。そしてジェファスン派の領袖チャールズ・ジャービス(Charles Jarvis)の演説やジョゼフ・クロスウェル(Joseph Crosswell)の革命に寄せた詩の朗讀に對しては市民たちの熱烈な喝采がおくられた。いうまでもなくかゝる國民的熱狂には嘗つてアメリカの獨立戦争に際しフランスから受けた軍事的、經濟的援助に對する熱い國民的感謝がこめられていたにちがいない。とはいへ、國民のすべてがフランス革命に狂喜していたわけではない。とりわけ大商人とその政治的代辯者たるハミルトン派を中心とする一部國民は大西洋のかたに進展する革命には當初から強い嫌惡と反感を示していたからである。むしろその敵對感情は、大商人が英國の信用に依存していた事實の中に充分な經濟的根據をもつものであつた。そして權威、官憲及び貴族主義に固執する彼等にとつては、フランス革命はいわば聖像破壊運動であり、恐るべき傳統無視の行動としてその眼に映じたのであつた。かくてハミルトン派の支配下にあつた上院に於ても、夙に反革命的氣運が露骨に示され、例えば一七九〇年十月フランクリンの逝去に對しフランス國民議會から哀悼の意を表する決議文が上院宛送られ、之をアダムスが朗讀した際、これより先、國民議會が貴族の肩書を廢した行爲に關聯して上院議員たちの間で皮肉まじりに執筆者の肩書が問題にされたという一幕なども見られた。<sup>註</sup>従つて上院に於けるとりわけ反革命主義の議員たちはフランスの防衛問題に耳を籍すどころか、ルイ十六世が憲法に讓歩したことにさえ極度の憤激を示した程であつた。

之に對しジェファソンとその一派は廣く國民大衆の親佛感情を背景として、熱心にフランス革命を支持していた。その熱心こそは、革命の國フランスに向けられたものであると同時に實に彼自身の祖國しかも今や漸く反動化の兆を示しつつある祖國アメリカに向けられたものであつたのだ。そしてその熱心こそはまた、外ならぬ革命の國フランスから彼がもち歸つた火であつたのである。その意味でコルネリウス・ド・ヴィット(Cornelius de Witt)がジェファソンが眞に興奮を以てアリストクラシーの權力を憎むに至つたのはパリーに於てであるといつた言葉がいゝすぎであるとしても、ジェファソンが眞に「戰鬪的共和主義者」"a republican militant"としてフランスから歸國したとするウイリアムズの見解は正しいであらう。かくてジェファソンが澎湃として起る國民的熱狂を平靜な装いの中にも押え難い喜びを以て眺めたであらうことは想像に難くない。しかし彼にとつて一層重要な事は、アメリカ革命の運命がフランス革命の成否と直結してゐたことへの強い確信であり、フランス滞在以來彼は寸時もこの確信から外れることはなかつた。(因にこの確信こそ彼に戰鬪的共和主義の火を興えた原動力であつた。)すなわち一七九三年一月彼はパリーのアメリカ大使宛發した訓令の中で「若しも周圍の事情からフランスの政局に關する意見の表明を餘儀なくされたならば、その意見は當然われわれ國民大衆の氣持ちと一致したものでなくてはならない。つまりその國民の氣持というものは、近代に於ていち早く政治の基礎を國民の意志の上におくことに思いついたのは外ならぬわれ／＼なのだから若し他の國民でわれ／＼と同じ原理に到達し、その旗幟をわれ／＼の傍にうち立てるものが現われた場合それを見て黙ばずにはいられない、さういふ氣持なのだ」。とゞ、またその後いくばくもなくロンドン駐在のアメリカ大使宛書簡の中で「われわれはわれ／＼の政府を基礎づけてゐる原理、すなわちすべての國民はみづからその欲する政府の下に統治され且つみづからの意志に従つてその政體を變革しうる權利を持つという原理を他國民に對しても否定することは出来ない」と述べてゐる。これ等の言葉は正しく當時に於ける彼のフランス革命に對するそのような確信を最も端的に表明したものに外ならぬ。ジェファソンとその一派にとつてフランス

革命は何よりもまず特權の終焉を意味し、それ故にデモクラシーを、そしてさらにリパブリカニズムを意味した。かくて同じ年の夏革命フランスがブランシュヴィヒ (Herzog von Braunschweig) の普墺聯合軍による攻撃の脅威にさらされた時、彼等は遠く國境の守りに立つ若きフランスの兵士たちといかに深くその憂いを共にし、それ丈けに又その秋のヴァルミ (Valmy) に於ける戦捷の報を耳にした時はいかに雀躍して歡呼したことか。ともあれ一七九二年の末まではフェテラリストの策謀にも拘らずアメリカに於ける國民的對佛感情は維持され、ジェファソンはかゝる國民感情の支持の上にいわば得意の頂點にあつたのである。一七九三年一月彼がその養子に宛てた書簡は彼のかゝる得意さを最も卒直に物語っている。曰く「フランスからの報導は依然良好であり而もその好調は今後も持續される見込みである。フランスに於ける革命の成果については今や革命の敵對者たちといえども之を疑うわけにはいかないであろう。革命が当地に齎らした衝擊や、新聞などに現われた敵對者たちの意見はわが國のとるべき政治形態がこれまで何人も想像しえなかつた程大きな影響を蒙つている事實を示している。さきにわが國の政治が寛大な政策をとるようになつてから激しい反動の道程に入り、何事につけ王政のくだらない虚飾を喜ぶ風潮が見られたが、今やその傾向が逆轉し、かねてわれ々の希望していた通り正しい中庸の道、すなわち人民の弱點に對してでなく人民の理性に訴える法の支配へかえらうとして<sup>註10</sup>いる。」と。

○

しかるに一七九三年一月フランス國王處刑の報道はアメリカにおけるかゝる對佛感情の上に俄然重大な變化をもたらすことゝなつた。すなわち冬の大西洋の荒浪はその報道を直ちに新大陸に傳えなかつたけれども、雪解けとともに漸次ルイ王處刑の真相が次第に詳らかとなるにつれ、昨日まで革命の歡喜に輝いていた民衆の表情は忽焉として暗い愁いに閉ざされるにいたる。教會は王のために弔鐘を揺り鳴らし、巷には喪服を纏う男達、黒バラを胸に着けた女達の姿がゆきかい、市



民たちはいつしか、かつてのフランスからの援助が外ならぬルイ王の贈物であつたこと、ルイこそ眞にフランス國民の解放を念慮していた當の人物であつたことなどにつき、まことしやかに流布される反革命主義者たちの煽動的な囁きに耳を傾けはじめた。もちろん、一方に於て王の處刑に對するジェファスン派の騒々しい熱狂も一層熾んであつたけれども、彼の行動は情勢の悪化とともにやゝもすれば粗暴に奔り、漸次民衆の心から離れてゆく。しかもこの機を逸せずハミルトン派の活動はとみに活潑化し、反動がフランス革命の人氣を脅やかすほどに顯著となる。まさに「國民の過半が一夜にして王黨に變じたかと思われた」事態の急變ぶりであつた。<sup>註17</sup>

かゝる事態の激變はジェファスン派の指導層に驚愕と忿怒と落膽とを感じしめたことはいうまでもない。しかし、また彼等が涙もろい民衆と共にフランス革命に對する考え方や同情を變えたのでないことはもちろんで、當時マチスンがジェファスンへ宛てた書簡の中で王の處刑事件に觸れ、「若し彼が反逆者であるとしたら彼は他の人間と同様に處刑さるべきである。」<sup>註18</sup>と述べた言葉は、とりもなおさず彼等ジェファスン派の考え方を代表するものであつた。しかしジェファスン自身が國王の處刑についてどのような考えをもつていたかについては、たしかに興味ある問題であるが、結論は恐らく、ジェファスンは「國王を他の罪人達と同様、刑罰に服する義務あるものと見做す見解にほゞ満足を感じて」<sup>註19</sup>いながらも、國王の處刑そのものには反對の立場をとつたであらうとする見方に落ちつくべきであらう。

さてかゝる反革命主義の氣運の抬頭する中で、あたかもその四月彼のいわゆる「市民ジェネー事件」"Affair of Citizen Genet"が勃發する。この事件は革命フランスに對するアメリカ民衆の薄れゆく熱情の焰をいま一度かきたてるのであるが、ジェネーのあまりにも傍若無人な行動はジェファスン派の人々からさえ強い擧蹙を招く結果となり、かくてその事件の落着とともにさしも昂揚したアメリカの國民的熱狂も終に冷却し去つてしまふのである。ジェファスン自身も亦ジェネー個人の行爲を苦々しく感じていたようで、彼が當時の駐佛アメリカ公使モーリスをしてフランス政府にジェネー

の召還を要求せしめた同公使宛書翰は彼のアメリカに於ける行動を詳述した後「若しジェネーがあくまでその行動を  
つゞけるならばその結果はわれ／＼にとつて頗る危険であり、又極めて屈辱的にして有害なる先例をつくるものであつて、  
吾々としては彼の後任者が到着して彼の職務を引繼ぐ以前に於て彼の職務を停止することを餘儀なくされるかも知れな  
い。わが國民がまだ血を流すに至つていないのはジェネーの節制のせいではなくて、わが政府の忍耐によるものである」  
とのべ、いつにない烈しい語調でジェネーを非難している。しかしそれにも拘らずフランスとその革命に對する彼の同  
情と期待にはいさゝかの變化も生じていないのであつて、そのことはそれより先一七九三年二月、フランスの對英宣戰布  
告を契機としてアメリカの對フランス條約に基く參戰の問題が持ち上つた際、彼があくまで對フランス條約の有効性とそ  
れに基くアメリカの條約履行の義務を主張し、また大統領の中立宣言を反駁したその言論の中にも容易に之を窺ひうるで  
あらう。それどころかアメリカにおける革命フランスへの人氣が最も冷却したこの時期に於てこそ、彼のフランス革命に對  
する熱情と信仰とが、むしろ最も激しい昂揚を示していることは興味ぶかい。一七九三年一月彼はそのパリ駐在當時の秘  
書官ウイリアム・ショート (William Short) 宛て、次のように書き送つてゐる。

「避け難い鬭争の中で多くの犯罪者たちが裁判も開かれずに處刑され、又彼等と共に無實な人たちも倒れて行つた。そ  
ういふ人達を悼むのに私は決して人後に落ちるものではない。それらの中のある人々については恐らく私の生涯の終りの  
日まで、私の悲しみは止むことはないであらう。而もその悲しみは恰も戰場で倒れた人々に對するそれと同じである。と  
もあれ人民という武器——それは彈丸や爆彈のように盲目的ではないにしても、ある程度無鐵砲な一種の機械みたいなも  
のだが——を用いることは避けがたいことであつたのだ。心からなる人民の友であつた若干の人々は自らその生命を敵手  
に渡して死んで行つた。——しかし時と眞實とはいつの日か彼等の記憶を呼びおこし、その名を永久に留めるであらう。  
一方彼等がためらいなくそのために生命を捧げたその自由は、彼等の子孫たちによつて享受されるであらう。全世界の自

由は一つにかゝつてその闘いの結果にあるのだ。しかもそのような戦利品がそんなにも僅かばかりの無垢の血でかち得られたことが嘗つてあつただろうか。私自身の心はこの戦に殉じた幾人かの人達によつて深い傷手を受けはしたが、たとえこの大地に住む人の大半が失われるとしても、この闘いが失敗に終るよりは遙にましだと思ふ。かりにそれぞれの國にたゞ一人のアダムと一人のエベしか残されなくなつたとしても、而も自由が與えられるのであれば現状よりもどんなにましであらうか……………<sup>註22</sup>

ジェネー事件の終結後いくばくもない同じ年の十二月三十一日、ジェファスは國務長官の要職を自ら辭し、爾來三年餘に亘るその故郷モンチセロ (Monticello) における引退生活に入る。

しかし、もちろんフランス革命の運命はジェファスンが公職を引退していた間も、ずつと彼の心を占領しつゞけ、フランス國民に對する彼の信頼は依然として旺盛であつた。曰く「私は彼等が諸外國に對して完勝することを確信している。しかもその勝利——それは侵略國の暴君たちの不名譽にほかならぬが——は事の順序として必ずやヨーロッパ諸國民をそのような罪惡(筆者註「フラ」)に捲きこんだものども(筆者註「對佛」)に對して彼等の怒りを燃えた、せずにはおかないであらう。そして結局、王や貴族や僧侶たちがこれまで久しきに亘つて人々の血でぬらして來た絞首臺に、こんどは自分達自身がつけられるにちがいない」ともつともその間フランスは外はかゝる「ヨーロッパの焰」<sup>註23</sup> European Combustion に包まれ、内は恐怖政治の展開によつて深刻な國民的危機に直面したのであつて、さすがにジェファスンも一時は暗澹たる氣持に襲われなくてもなかつたが、それだけに又一七九五年四月フランスと對佛同盟諸國との間に平和の曙光が見えそめたときの彼の歡喜は實にたとへようもないものがあつた。彼は、若し平和が回復したら「この秋にはきつとロンドンでピシユグルー將軍と會合出来る」ことを心に夢み、「私はしばらく自分の幸福は犠牲にしても、英國へ行つてその島國で自由と共和主義の曙を祝福する」ことをひたすら念願していたのであつた。<sup>註24</sup> 運命は彼の念願を叶えなかつたけれども、彼

の引退生活の間にフランスの恐怖政治はテルミドールの革命を以て一段落をつけ、かくて彼が一七九七年三月副大統領として政界に返り咲いたときには、既にフランスはナポレオンの指導下に新なる情勢の展開を示しつつあつたのである。

○

以上われわれはフランス革命に對するジェファアソンの言動を革命の推移に對應せしめつつ、彼とフランス革命との關係を概観したつもりであるが、最後に彼のフランス革命觀につき氣づかれる二、三の問題點を中心に關説しておきたい。

ジェファアソンのフランス革命觀を考察するに當りまづわれわれに注意されることは、從來傳記作者達の間にジェファアソンを以て理想主義的人道主義者乃至は、反暴力主義の革命家となし、從つてフランス革命がその後半に於て暴力的段階に突入するや彼がその歴史的意義を没却し去るにいたつたと見做す見解の存することである。例えばライオネル・エルヴィンはその著「代表的アメリカ人」に於て「彼はもちろん完全に平等な政治的自由の保障される社會の主張者であつたが人道的な理想主義者でジャコバンではなかつた」から若し「彼が革命の後期の段階まで」「もつとパリにいたならば彼はおそらく彼と同様に急進的で同様に人道的なその友トム・ペインのように振舞つたであらう。」<sup>註25</sup>といふ、又歴史家C・D・ヘイズンもその論著「トマス・ジェファアソンとフランス革命」に於て「流血が不吉な前兆をもつて始まつたとき、彼は革命の意義を認めることを拒否し、その重要性を低く評價し、美しい夢が惜むべき極悪非道に變じた<sup>26</sup>と見るに至つた」とのべ、更に又英國のジェファアソン研究家であるM・ペロッフもその著「トマス・ジェファアソンとアメリカ・デモクラシー」の中で「結局ジェファアソンは人類とその未來について樂天主義者であつたけれどもフランス革命が始めた民衆運動、人民專制及び激昂した國民主義の時代は分別盛りのジェファアソンの目にはあらゆる點で前代に對する進歩としては映らなかつた<sup>27</sup>」と述べている。又わが國に於ても例えば辻重四郎氏はその著「ジェファアソン」に於てジェファアソンが革命の初期的段階に於てラファイエット一派の革命家たちに立憲王制の線<sup>28</sup>で王と妥協するように極力すゝめた點を指摘した後に「これらのことか

ら見てもジェファスンが血なまぐさい革命に少しの同情ももつてはいなかつたことも、またあのような暴力に訴えた革命主義者に同情をもたなかつたことも明白である」とされ、又「トーマス・ジェファソン」の著者長守善氏もその著書の隨所に過激主義者でなく無血革命主義者としてのジェファスンを強調していられる。

そこでわれわれはまずジェファスンが果していわゆる非暴力主義者であつたかどうか、革命に於ける暴力というものを彼がどのように理解し又之に對してどのような態度をとつたかという點について考察したい。さてフランス革命に於ける暴力を問題にするならばまず以てバスチーユ牢獄の破壊行爲そのものがすでに暴力行使であつたことは何人も否定しえぬところであらう。所でこの行爲に關する限り之に對する非難じみたジェファスンの言及は見受けられないが諸家によつてフランス革命に於ける暴力が問題とされているのは概ね國王の處刑以後のいわゆる恐怖政治を以て知られる革命の過激化した段階、乃至はそれ以後のボナパルトの時代に關してであるから、この段階に關するジェファスンの所見を檢討することが必要であり又當然であらう。ところが實際的にこの段階をとりあげたジェファスンの革命批判は遺憾乍ら甚だ寥々たるものであつて、恐らく諸家の見解もジェファスンの自叙傳や書簡に現われている極く概括的な短い發言を基礎としたものと思われる。たとへばさういう發言としては彼がその自叙傳の中で、自分が極力革命の急進化を回逃すべくフランスの革命家たちに君主立憲制の線を以て國王と妥協するよう慫慂したにも拘らず彼等が之に従わなかつた結果ついに悲しむべき暴力化の誤謬が犯されることゝなつたといふ、又同じ自叙傳の他の箇所でも暴力革命の張本人としての王妃の罪を非難したあとで、若し「王妃を修道院にでもとちこめて」いたら「冒險好きの軍人などが王位の篡奪を狙う隙は作られないですんだであらうし又世界の諸國家を混亂におとし入れて幾百萬の住民たちを毀損した極悪非道が行われる機會は與えられなくて済んだであらう」といふ、或いは又一八一七年六月バルベ・ドゥ・アルボワ (Barbe de Marbois)

(當時フィラデルフィア駐在フランス公使館書記官)宛書簡に於て「私が一七八九年末フランスを立去つた時、あなたの

國の革命は私の想い通り有能にして立派な人物の指導下にあつた。ところが彼等のあとを受け繼いだ人々の氣違ひ沙汰、  
そうでない人々の非行、嫉妬深い墮落した隣人の惡意に充ちた陰謀、總裁政府の不安、あなたの國のアッチラによる寡奪  
と壓制は人類の歴史に悲しむべき一時期を打出した、<sup>註33</sup>とのべ、更に又一七九三年六月ランドルフに宛てた手紙の中でも  
「フランス人は君主に無益な侮辱を加えたばかりでなくその隣人たちに自己流の自由を押しつけようとして大きな過ちを  
犯した<sup>註33</sup>」といつた類いのものがあげられるであろう。所でこれらの言説に於て革命の暴力化が齎した「悲しむべき一時  
期」としてジェファスンによつて想定されているものは最後に擧げたものを除けば單にいわゆる恐怖政治の時代だけをさ  
すのではなくて、むしろ彼に於てはそれと共にそれに續くボナパルトの時代に一層の重味がおかれていたということが注  
意されるのである。換言すればそれらの時代を通じて現われた專制主義、獨裁主義の再現に對して専ら彼の非難が集中さ  
れていることに氣づくのである。そしてこのことは彼の暴力觀の理解に極めて重要な示唆を與えるものと考へる。そこで  
われわれがこゝで想起したのはさきに引用した一七九三年一月W・ショート氏へ宛てられた彼の書簡である。この書簡  
は一月の始めに書かれたもので未だ國王處刑以前に執筆されたものであるとはいへ既に革命が充分激化の様相を露呈しつ  
ゝあつた段階を背景としたもので、そういう時期に於て彼がこのような革命批判を行つてゐることは、とりわけ彼の暴力  
觀を知る上にすこぶる注目すべきことである。すなわちそこに示されている彼は、ひたすら流血をおそれて恐々たる暴力  
否定主義者であるどころか、實に大地に住む人類の半ばが血を流して倒れてもなお自由を絶叫せんとする熱血の革命家であ  
つたのである。

おもうにアメリカ革命はアメリカの民衆が敢然武器をとつてイギリスの國王、國王の政治とその軍隊に對して反抗した  
闘争であり、それはまぎれもなく武力に暴力革命であつた。しかもそれを獨立宣言書を以てジャステイファイしたのは外  
ならぬジェファスンその人であつた。彼は世紀の大文書の中で云つた、「永く存続した政府は輕微且つ一時的の原因によつて

は變革さるべきでないことは實に慎重な思慮の命ずる所である。従つて過去の經驗もすべて人類が災害の堪えられる限り、彼等の年來従つて來た形式を廢止しようとせず、寧ろ耐えようとする傾向を示している。然し連續せる暴虐と篡奪の事實が明かに一貫した目的のもとに、人民を絶對的暴政のもとに壓倒せんとする企圖を表示するに至るとき、そのような政府を廢棄し、自らの將來の保安のために新なる保障の組織を創設することは、彼等の權利でありまた義務である」と。<sup>註4</sup>

かくて彼は新政府樹立についての人民の權利、專制に對する反抗の權利を肯定したのであるが、それは當時に於てはとりもなおさず暴力の肯定を意味するものに外ならなかつた。蓋し當時に於ては爲政者による讓歩が考えられざる限り、これらの反抗權が實現される手段は全く欠如していたからである。そしてほぼ同じ事情と理論とがフランス革命について考えられるであろう。勿論かく云えばとて、彼が好んで暴力の行使を望んでいたというわけではない、例えばフランス革命の初期に於て彼が一應立憲君主制の線で革命を落着せしめようとしたのも、たしかにそういう氣持の幾分の現われであつたかも知れない。然し乍らその場合でさえ、彼がそこで示した妥協策は決して彼の平和主義、非暴力主義の單なる反映であつたのではない。そこに示されている彼の政策はむしろ一層冷やかな理性の計算の中から、換言すればフランスの歴史、その社會、その政治機構に關する彼の冷徹なる觀察の中から生れたものとこそ見るべきだと思われる。その點については例えば一七八八年十一月十八日附マチソン宛の手紙などが参照され、そこで彼がフランスの人民について「不幸は彼等が當然うけてよい幸福を未だ受けうるまでに成熟していない」とい<sup>註</sup>つている彼の言葉の片鱗の中にも見出しうるであろう。しかし一層重要なことは彼の革命に對する一層基本的な考え方に關係している。即ち彼によれば、すべての社會は概ね二十年毎に更新する。すなわちある時代の成年層を構成する大衆は二十年を周期として死滅し新しい世代の成年たちによつてとつて代られる。しかるに各世代はそれ自身の要求をもつ。されば社會は概ね二十年毎にこの新しい世代の要求に應じ、それぞれその欲する自己の政府を選びうる爲に憲法を改正しうる適宜の措置を豫め用意しておくこ

とが肝要である<sup>註</sup>。革命に關するかゝる考え方の特徴は革命というものをあたかも生物學的生理現象の如きものとしてとらえている點に見出され、はなはだ興味深い。そしてそこには革命に對する倫理學的評價など微塵も見られない。以て彼の革命權の主張や革命に於ける暴力行使に對するその考え方の根本にいささかの恥らしいも感じられていない所以が知られるであろう。因に以上の見解は一八一六年七月シェファスンがモンテセロの閑居から友人カーシュバルに宛てた長文の書簡の中で展開されているものであるが、なお同じ書簡の他の箇所で彼はまた次のように述べている。「私は亦知つてゐる。法律や制度は人智の進歩と相俟つて進行しなくてはならない。人智が發達し啓蒙されるにつれ、新しい發明がなされるにつれ、新しい眞理が發見されるにつれ、そして習慣や考え方が環境の變化と共に變るにつれ、もろもろの制度も又向上し時代と共に前進しなければならぬ。文明社會をその先祖たちの未開な制度にいつまでもとどめて置くことは恰も子供の頃にびつたり合つた着物を大人になつてからも尙お身に纏うことを強いるようなものである。そのような不合理な考え方が最近ヨーロッパを血の海に浸したのではないか。ヨーロッパの君主たちは環境の漸次的な變化に賢明に讓歩することをしないで、又進歩的な適應に好意を示すことをしないで、舊い弊害にしがみつゝ、牢固たる因習の背後にかくれて身を衛り、臣民たちをして餘儀なく流血と暴力によつて衝動的、破壊的な革新をあえて追求せしめたのである。」かくてシェファスンにとつては、革命＝暴力はまた歴史の必然でもあつた。尤もそれは彼によつて人爲的に全く避けることの出来ないものとして意識されていたわけではない。革命初期のバリに於ける彼の活動の凡てはたしかにかゝる不幸を回避せんとする努力の現われでもあつた。たゞ彼にあつては前述の如くその努力がたゞ觀念的に行われたのではなく、フランスの歴史的、社會的、客觀狀勢に對する彼自身の情勢判斷の裏付けに於て行われたところに、實際的な革命家としての彼の本領があつたのである。しかも事態の妥協的收拾が不可能なことが明かとなるや、彼は歴史を押し流す不可抗力としての暴力を敢然と認めたのである。しかしその暴力は民衆によつて決して好んで拾ひあげられたのではなく、むしろ封建的專制權力の歴史へ



の無謀な反逆が彼等をして餘儀ない暴力行使へ向わしめたのであると解された。従つて彼は暴力行使の結果に對する一切の責任は民衆にではなく、却つて封建的勢力を自體にあると信じていた。そしてそのような考え方については彼の自叙傳に於けるルイ王と王をとりまく封建勢力に對する彼の批判の中に充分讀みとることが出来るであらう。

なおジェファソンに於ては革命に於ける流血や破壊は常に人類のよりよき進歩、より高き向上との結合に於てのみ是認された概念であつたが故に、革命のともなう一時の挫折や後退が革命のめざす新なる建設やより大いなる前進への希望と信頼をうち破るといふことは到底考えられないことであつた。事實フランス革命の進展するあらゆる段階に於て彼が終始一貫この革命への變ることなき同情と期待とをもちつづけたことはわれ／＼の既に見たとおりである。

最後にわれ／＼はジェファソンが一つの比喩を以てフランス革命の世界史的意義に言及した興味ある一節を引用して擧筆した。

「この自由の球は今や非常に好調な運動をつづけてゐるからきつと地球を一巡りするであらう。少くとも全地球の中啓蒙の光に照らされてゐる部分を。蓋し光と自由とは手を携へて進むものであるから。われ／＼の國がこの球の運動に最初のきつかけを興えたことはわれわれの光榮とする所であり、またこの運動の先頭に立つものとしてわれ／＼の後に失敗がつづつてゐることもわれ／＼の幸福とするところである。」<sup>註 39</sup>

註 1 J. S. Williams, Thomas Jefferson, Columbia University Press, 1913, P. 56

2 Letter to John Jay, July 19 1789, from The Life and

Selected Writings of Thomas Jefferson, ed. by A.

Koch & William Peden, 1944, P. 487

3 Autobiography 1821, from The Complete Jefferson,

Containing His Major Writings, published and un-

published, except His Letters, assembled and arra-

nged by Saul K. Padover P. 1182,

4 Ibid., P. 1189

5 Ibid., P. 1190-1191

6 Ibid., P. 1189-1191

- 7 Ibid. P. 1182
- 8 エェール・ガクソット著フランチス革命上巻、一九四頁  
(松尾邦之助譯)
- 9 J. S. Williams, P. 62
- 10 長守善氏著「トーマス・ジエファースン」昭和二十五年、刀  
江書院九六頁—九七頁參照
- 11 Claude G. Fowers, Jefferson and Hamilton : The  
Struggle for Democracy in America, 1925, P. 209
- 12 J. S. Williams, *ibid.* P. 57
- 13 *Ibid.* P. 60
- 14 Quoted from C. G. Bowers, Jefferson and Hamil-  
ton p. 210
- 15 *Ibid.*
- 16 Quoted from Max Beloff, Thomas Jefferson and  
American Democracy, 1949, p. 152
- 17 C. G. Bowers, *ibid.* p. 211
- 18 *Ibid.*, P. 212
- 19 *Ibid.*,
- 20 Autobiography, from S. K. Padover, p. 1188
- 21 Letter to Gouverneur Morris, August 16, 1793, from  
Saul K. Padover, p. 170
- 22 Letter to William Short, Jan. 3, 1793, from A. Ko-  
ch & W. Peden. pp. 521—522
- 23 Quoted from Max Beloff, *ibid.*, p. 154
- 24 *Ibid.* p. 155
- 25 ライオネル・エルヴィン著本田良介氏譯、代表的アメリカ  
人、(上)一四五頁
- 26 Quoted from J. S. Williams, *ibid.* p. 59
- 27 Max Beloff, *ibid.*, pp. 260—261
- 28 辻重四郎氏著ジエファースン一六二頁(昭和二十三年大雅  
堂)
- 29 長守善氏著トーマス・ジエファースン(昭和二十五年刀江書  
院)八八頁—八九頁九四頁九七頁—九八頁
- 30 Autobiography, from S. K. Padover, p. 1182
- 31 *Ibid.* p. 1138
- 32 Letter to Monsieur Barbé de Marbois, June 14, 181  
7, from A. Koch & W. Peden, p. 681—682
- 33 Letter to Randolph, June, 1793, Quoted from Max  
Beloff, *ibid.* p. 154
- 34 原典アメリカ史第二卷所載「獨立宣言」(高木八尺博士譯  
による)一八八頁—一八九頁
- 35 Letter to Madison, Nov. 18, 1788, Quoted from J.  
S. Williams, *ibid.* p. 62

但しこの点に關して「スロップが「全然自治に慣れてい  
ない國民には完全な自由を確立  
するから第一に肝要なことはまず以て基本的な自由を確立  
すること、そしてそれ以外のことはまず以て然るべき時機が  
来るまで成熟を俟つべきである」というジエファースンの見

解は彼に於ては革命の前夜からブルジョア家の復興に至る  
 まで終始一貫して變ることがなかつたと云つてゐるが、こ  
 の主張とは直ぐに賛同しなかつた。 Cf. Max Beleft, *ibid.*,  
 p. 259

- 36 Letter to S. Kerscherval, July 12, 1816, from A.  
 Koch & W. Peden. *ibid.*, pp. 675~676
- 37 *Ibid.* p. 674
- 38 Autobiography, from S. K. Plover, pp. 1188~1189
- 39 Quoted from Max Beleft, *ibid.*, p. 155

Jefferson and the French Revolution

by T Hattori

Why Jefferson's advice to the French revolutionists at Paris was upon much more conservative line than any declaration of policy ever made by him, than any political act of his in America? Some of the biographers of him insist that it is because he abhorred violence in revolution and tried to avoid the radicalization of Revolution. I believe, it is not

only due to that, but rather due to the following reasons : First, he realized that the best attainable should be procured at given chances. Secondly, he saw clearly that the best attainable in France at that time was far behind the best attainable in America. By the way, he rather affirmed right of resistance and even justified the violence in revolution if necessary.